

歴史認識問題研究会公開研究会

『反日種族主義「慰安婦問題」最終結論』出版記念講演会

令和6年6月15日 於ベルサール西新宿

嘘の歴史に振り回された歴史—慰安婦運動時代の終焉

朱 益 鍾（『反日種族主義「慰安婦問題」最終結論』著者）

こんにちは、朱益鍾（チュ・イクチョン）です。まず、発表の前に、今日この場を作ってくれた歴史認識問題研究会の西岡先生と関係者の方々に感謝を申し上げます。

今日発表する内容のタイトルは、「嘘の歴史に振り回された歴史—慰安婦運動時代の終焉」というタイトルですが、慰安婦問題が台頭してきた1990年代が慰安婦運動の始まりだとしたら、その慰安婦運動というのは終焉の時代を迎えたという意味です。1965年に日韓国交正常化が行われた後、約30年間は日本と韓国は良好な関係を維持してきましたが、1990年代初めから激しい歴史問題などで両国の間で様々なトラブルが発生しました。その理由は大きく二つ挙げられますが、皆さんご存知のように、一つは慰安婦問題、そしてもう一つは戦時動員労働者問題であります。

慰安婦問題を一言でまとめると、朝鮮人の少女が日本の官憲によって強制連行されて性奴隷として酷使された後、終戦後には捨てられたという内容です。戦時労働者問題を一言でまとめると、日本統治の末期に労働者として徴用つまり強制動員された朝鮮人が酷使され、虐待されたという内容です。

このような問題を提起してきた韓国の左翼の話によると、国交正常化の時に結んだ請求権協定には慰安婦問題と徴用問題は反映されていないので、追加問題としてこれに対して謝罪と賠償をもらうべきだと主張しています。このような立場で、日本に対する賠償を要求する運動が始まりました。こうして慰安婦運動が30年以上続き、徴用工に対する賠償訴訟が約20年間行われました。

この二つの問題の中で、慰安婦問題は大きな成功を挙げたといえます。韓国のこのような新しい要求について、日本政府がある程度の責任を認めたからです。日本の首相や閣僚が何度も謝罪をただけでなく、金銭的補償もありました。2015年に韓国の朴槿恵大統領と日本の安倍晋三総理が慰安婦合意を持つことで、日本側からいろんな補償が行われました。これだけではなく、韓国はアメリカやヨーロッパ、カナダなどの議会で働きかけ、慰安婦問題に関して解決を日本側に求める決議が採択されました。反面、戦時労働者（徴用工）問題に関しては、日本側が責任を認めなかったため、韓国で被害者を名乗る人たちが韓国の裁判所に訴えて、日本企業に対する賠償などの判決をもらうことに成功しました。

慰安婦運動が大成功した理由の中には、慰安婦に関する被害物語をうまく作り出したことがあると思います。慰安婦の物語が形成されることに関しては、韓国と日本が共同で作ったものだと言えます。一緒に作業することによって、運動の成功を収めたので

す。韓国側は被害者と名乗る元慰安婦のお婆ちゃんたちを提供し、彼女たちは当時の苦勞話、その後の人生が滅茶苦茶になったことを訴えたことで、人々から大きな同情と支持を受けました。自分が慰安婦だったことを人前で公表することは難しいことです。一般の人々は「お婆ちゃんたちがこのような嘘を言うだろうか?」と考え、多くの人々の共感を得て、元慰安婦たちを支援しようという声が広がりました。

日本側からは、多くの研究者たちが慰安婦は性奴隷だという説を作り出して広げることになりました。吉見義明先生と林博史先生のような研究者たちは、日本軍が主導して慰安所を設置したと主張しました。そして、社会運動家である西野瑠美子先生などは、慰安婦たちと日本軍そして慰安所を経営した業者の証言を基に、慰安婦の被害性を拡散させることに成功しました。人権派と言われている戸塚悦朗弁護士は、慰安婦の実態がまだ明らかになっていない1993年から、国連で性奴隷説を訴えました。彼の作った性奴隷という言葉は、今日まで引き継がれることになりました。

つまり、韓国側からは市民団体である挺対協（韓国挺身隊問題対策協議会、現在は正義連に改称）が慰安婦運動を起し、日本側からは研究者と社会運動家が理論を作り出すことによって、日本と韓国は分業制のように慰安婦運動を盛り上げることになりました。

しかし、慰安婦運動の成功はそこまででした。大きく見ると3つの要因があります。

1つ目は、日本側の研究者が行った研究の信憑性が崩れたということです。慰安婦の被害については証言だけです。文書や物質などの客観的な資料などの証拠はありませんでした。例えば、強制連行されて無理やり慰安婦にされた、何の補償ももらえなかった、虐待を受けた、戦後は置き去りにされた、というのはお婆ちゃんたちの証言のみで、客観的な証拠は何もありませんでした。つまり、性奴隷説には客観的な証拠がなく、未だに証明されていないのです。

2つ目は、慰安婦運動団体の豹変した言動です。例えば韓国の市民団体である挺対協は、2015年の慰安婦合意が行われる前に韓国外交部と15回も会議を行いました。会議中、挺対協は韓国の外交部から様々な情報を受け、最終的に合意に了承していたのですが、いざ慰安婦合意が発表されると、慰安婦お婆あちゃんたちの意見が反映されていないと拒否しました。一連の挺対協と韓国外交部とのやり取りは、当時は知られていなかったのですが、その後に明らかになったのです。

また、3つ目は、挺対協の代表（尹美香）が国民から集めた後援金を横領したことが暴露され、有罪判決を受けたのです。こうして、慰安婦運動は真実がない運動だと暴露されました。一連の事件を通して、一般の韓国国民には慰安婦運動というのは真実がないという真実が広まりました。韓国では李栄薫先生、日本では西岡力先生、アメリカではラムザイヤー先生が、強制連行性奴隷説に関する強力な反論を出しました。これらの出来事により、既存の強制連行、性奴隷は全面的に見直しをしなければならない事態になりました。

私は2021年から3年間研究し、韓国で『日本軍慰安婦インサイドアウト』という本を出版しました。これは新史料の発見を紹介するのではなく、今までの研究成果である吉見義明先生と林博史先生の研究内容を検討して、私なりに異なる解釈を発表しました。この本が出てからももう半年ぐらいになりますが、今まで韓国国内では、これに対する反響はありませんでした。韓国の保守と言われている朝鮮日報との交渉はあったのですが、朝

鮮日報は慰安婦が性奴隷ではなかったという記事を書くことに躊躇いがあったようです。彼らは慰安婦問題に異を唱えることを、タブーとして考えているようでした。韓国の慰安婦市民団体である挺対協は、名前を正義連という名前に変えて活動しているのですが、正義連側もこの本に対して何の反応も示していません。その理由は、彼らがもし私の本を持ち出して批判すると、逆にそれが話題になってこの本をいろんな人が読むようになるので、彼らは今も沈黙しているのだと思います。

半年経った2024年6月に、この本が日本語に翻訳されて『反日種族主義「慰安婦問題」最終結論』という題名で出版されることとなりました。本書の内容としては、慰安婦問題を長年研究してきた李米薫先生が『反日種族主義』（2019年）で繰り広げた慰安婦論を、私が全面的に補完・強化したものとと言えます。ですので、この本は『反日種族主義』シリーズの続編と言えます。

私がこの本を出した理由は、韓国人の今までの考え方を変えるためですが、実はこの強制連行説と性奴隷説が始まったのは日本です。慰安婦の嘘の本陣が日本なので、日本側の世論も変える必要があると思って、自分の本を日本で出すことになりました。歴史問題をもって政治を動かそうとすることを、私は歴史政治と言いますが、慰安婦問題こそ歴史政治と言えます。それは、慰安婦問題を語ることで反日感情を刺激して日韓関係に影響を与えようとする、政治的な下心があるからです。反日歴史政治というのは韓国で盛んに行われているのですが、日本でも似たような問題が起きているので、日本でも私の本を出すことで、皆さんに慰安婦問題に関して色々知ってもらいたいという気持ちがありました。

全体の内容を簡単にまとめると、次のような内容になります。

まず慰安所があった場所ですが、慰安所というのは当時の日本帝国のどこにも存在したのではなくて、戦場だけにあった施設です。数十万人の慰安婦が動員されたと言われていますが、特に20万人という数字が多く引用されていますが、慰安婦を経験した人数は約3万5千人だと分かっています。また、この中で日本人が一番多く、次に中国人、朝鮮人と続きます。

少女が連れて行かれたという話が韓国でよく言われているのですが、実は法的に慰安婦になるためには17歳以上でなければなりません。そして実際はほとんどが20歳以上でした。そして官憲によって強制連行されたという話がありますが、それは事実と違って、業者の募集による運営でした。慰安婦を性奴隷と呼ぶのですが、それも間違いです。働く前に業者から前借金を貰って、働いてそのお金を返済するという契約労働者でした。慰安婦は確かに重労働ではありましたが、収入も多かったというのが事実です。

戦後に慰安婦が虐殺されたという話がありますが、それは捏造された話です。この話について、もう少し詳細な内容をご紹介します。慰安所は戦場に設置されていますが、戦場は中国や東アジア、太平洋の島、そして沖縄のような地域が戦場です。

挺対協が発行した証言集は全部で8冊ですが、その中には103人の元慰安婦の証言が載っています。それらの証言を検討すると、朝鮮、台湾、日本などで慰安婦をしていたという話がありますが、それはあり得ない話です。日本軍慰安所は戦場に設置されたもので、日本軍の戦闘地域ではない朝鮮や台湾、日本本土にはありません。この点だけを考えても、証言者の3分の1以上は慰安婦ではないと言えます。

慰安婦の人数に関してですが、これは日本軍の増員に比例して増えていきます。1938年から40年の日中戦争の時に中国にいた日本軍は約85万人でした。兵士150人につき慰安婦は1人ということだったので、中国にいた慰安婦は5700人ほどだったと考えられます。1941年に太平洋戦争が勃発し、海外の戦場へ派兵される日本軍が170万人程度に増えました。1944年には280万人にまで増加します。

こうすると慰安婦の人数を推定できます。計算の結果は、先ほど申し上げたように約3万5千人と判別できます。慰安婦運動では、被害を誇張して数十万人の朝鮮人慰安婦がいたと言い、慰安婦の中でも朝鮮人慰安婦の被害が大きかったという嘘をついています。

次は若い少女を強制連行して慰安婦にしたという話ですが、写真のように、慰安婦像は少女の姿をしています。慰安婦の銅像が全国に150体くらいあります。これは韓国人としてみづかしい姿です。韓国は歴史人物の銅像をあまり建てない国です。韓国では近現代史に関しては歴史的な合意がされていないので、近現代の人物の銅像はあまり建てられなかったのです。しかし、こういう少女の銅像が全国に150体、ソウルには28の区があり、全てではありませんが、ソウルにもこういう銅像が多く建てられているのは極めて珍しい現象です。

次に紹介する銅像は、海外に設置されている慰安婦の銅像です。写真はドイツのベルリンに建てられた銅像です。これに関しては、この銅像は撤去が進められていると聞きました。



ドイツ・ベルリンに建てられた慰安婦像（写真提供：朱益鐘）

慰安婦の年齢に関する話ですが、娼妓、芸妓、酌婦になるには法律上17歳以上でなければなりません。慰安所で実際に働いた女性の年齢を確認することができる資料が三つあります。一つ目は1944年に沖縄の大東諸島にいた朝鮮人慰安婦7人のうち19歳が2人、21歳が3人、25歳が2人というもの。二つ目は同じく1944年に中国浙江省金華の朝鮮人慰安婦106人のうち最少年齢19歳、最高年齢31歳、平均年齢24.3歳というデータ。最後は、1944年、ビルマで捕虜となった慰安婦の年齢が最少年齢19歳、最高年齢31歳、平均年齢25歳であったことが判明しています。こうした記録を見ると、若い少女が無理やり連れて行かれて慰安婦になったというのはいかなる話だとも分かります。

ここで、女性は日本軍によって強制連行されたのか、という話をしたいと思います。左側の写真は、1997年に出版された『母・従軍慰安婦—かあさんは「朝鮮ピー」と呼ばれた—』（尹静慕）という本の裏表紙に描かれている絵です。慰安婦問題が騒がれる前の1990年代までは、このような絵は韓国国内でも見られませんでした。しかし、97年にはこのような絵として知られるようになりました。この絵を見ると、女性が後ろにいる家族を振り向きながら、両腕を軍人たちに掴まれて連れ出される場面になっています。このようなイメージが韓国で定着してしまい、2016年には映画でも表現されます。「鬼郷」というタイトルなのですが、ここでは日本軍4人によって少女が連れて行かれている場面が出ています。



左：尹静慕『母・従軍慰安婦—かあさんは「朝鮮ピー」と呼ばれた—』
 右：映画「鬼郷」（写真提供：朱益鍾）

軍人や官憲によって強制的に連れて行かれたという話は、韓国で一番有名な慰安婦被害者である李容洙という人の証言からも確認できます。彼女はテレビで証言をしたことがあります。1992年のテレビなのですが、元慰安婦として最初に証言したのは金学順という人で1991年8月14日に話をしました。1年後にテレビで証言をしたのが李容洙だったのですが、この時は顔も隠れていました。

KBS 光復節特集 1992.8.15.

<生放送：私は女子挺身隊 - 民族受難の痛みを乗り越えて>

証言者：李容洙



また、ここにまだお顔を見せるのが困難な事情のある方が
 出てきていらっしゃいますが

李容洙による初証言の様子（映像提供：朱益鍾 字幕翻訳：崔碩榮）

この時の李容洙の証言は、「私は貧しくて着るものも食べる物もありませんでした。そのような状況である人が来て、ワンピースと靴をくれたので私は喜んでついていきました」と話しています。すると司会者は、「つまり、騙されてついていったんですね？」と話をしています。

しかし、この人は2007年にアメリカの議会で証言をしているのですが、その内容がちょっと違います。李容洙はアメリカの議会で証言するために英語を勉強したのですが、それが映画化されて「アイ・キャン・スピーク」が作られました。2007年の彼女の証言は「夜中に女性と日本軍が入ってきて自分を脅迫して連れていった」と話しています。李容洙の証言は何度も変化しています。1992年ではワンピースと靴に惹かれてついていったと話していたのですが、2007年にはナイフのようなもので威嚇されて連れていかれたと言っているのです。

強制連行が考えにくい理由があります。中国の上海には日本の領事館があり、その領事館は朝鮮人女性が入国するために色々な書類を求めていました。その書類は身分証明書、慰安婦営業の許可願い、親権者の承諾書、戸籍当本、印鑑証明書などが必要でした。これは単純に入国審査をするための書類ではありません。慰安婦営業をするためには、日本軍は慰安所に所属する人たちの身分を全て確認しなければいけなかったのです。日本軍はこうした書類を確認することで、慰安婦営業に来ている人を管理したのです。

例えば、身分証明書というのは慰安婦の女性と業者、そして女性の親が同席して確認する書類でした。つまり、慰安婦の女性の家族の同意がなければ証明書類を発行してもらえなかったということです。女性を父母に隠れて誘拐したり、暴力で女性を攫ったり、映画のように軍人や官憲が無理やり連れ出すというのは、実際はあり得なかったということです。女性の親と業者との合意の仕組みに関しては、ハーバード大学のラムザイヤー先生の論文で証明されています。

一人の女性が慰安婦になるためには、三つの主体の合意がなければなりません。日本軍、慰安所の業者、そして親権者です。日本軍は慰安所の設置を決めた後、業者を選んで業者に慰安所を作らせる命令を出します。慰安所が設置される前に、どのような女性を慰安所に呼ぶのか、そしてどのような方法で集めるかを業者が決めます。業者は経済的に余裕がある家庭と交渉するわけではありません。つまり、貧困な家庭の親と交渉して女性を慰安所に連れて行きました。現在では、親が売春施設に自分の娘を売ってお金を貰うというのは大きな犯罪です。しかし、当時は日本でも韓国でも親がお金を貰ってから自分の娘を業者に渡すことは犯罪ではありませんでした。そして、実際に行われていました。今の基準で見ると考えられない話ですが、当時の基準で見ると、合法的な行為だったということです。

慰安所での生活は性奴隷と言えるものだったのかについてお話します。奴隷と言ったら、奴隷の所有者、奴隷主が奴隷を実際に所有しているということを意味します。その所有権というのは、どうやって発生するかについて考えてみます。所有権というのは、暴力によって所有することになったり、もしくは前借金によって奴隷になるケースがありました。しかし、慰安婦の女性たちに関しては暴力によって連れていかれた訳ではないので、暴力による性奴隷説は成立しません。

前借金によって奴隷になったのかというと、慰安婦は前借金をもらって返済しながら営

業をしています。返済が終わったら慰安所から離れるので、前借金のために奴隷になったというのも実際にはあり得ないです。一般的に、奴隷とは主人によって養われるのですが、報酬を受け取ることはありません。慰安婦のお婆さんは、自分たちが手に入れた金はないと主張しました。また、慰安婦問題の研究者も報酬は無かったと主張しました。しかし、報酬に関する記録が残っています。借金返済中の慰安婦が手にする金額は売上の13%くらいです。借金返済中の金額が少なかったため、自分は報酬を貰っていなかったと勘違いすることがあります。

しかし、借金を返済した後は売上金の50%あるいは60%を貰ったため、慰安婦たちは無報酬だったという説は成立しない話です。有名な慰安婦に文玉珠という人がいますが、この人はビルマで慰安婦生活をしていました。下関で発見された証拠があるのですが、彼女の野戦郵便貯金原簿が残っていました。この中に貯金額が26,343円と記載されています。現在の金額で計算すると、2億円くらいの金額になります。彼女は3年1ヶ月間働き、約2億円を稼いだのです。文玉珠は終戦までビルマに残っていて、日本に寄らずに直接朝鮮に帰国しました。そのため、彼女は自分が預けた金額を下ろせなかったのです。

反面、実際に大金を稼いで朝鮮に帰国した人もいました。日本軍慰安所管理人の日記という資料があります。そこには金安守という慰安婦の話が出ていたのですが、彼女はシンガポールで2年4ヶ月慰安婦生活をしましたが、1万1千円を稼いで1944年12月に朝鮮に戻りました。その時に全額を先に送金して帰りました。彼女はその後、朝鮮で食堂を開いて生活したと思われる。金安守は2年4ヶ月で1万1千円を稼ぎましたが、当時の教師は1ヶ月で50円ほどの給料でした。それを考えると、彼女はかなり大きい金額を得たと思われる。

慰安婦を虐待したという話がありますが、それも実際にはあり得ない話だと思います。なぜかというと、例えば日本軍が慰安婦に対して暴力を振るった場合、慰安婦が怪我をしたり顔が痣だらけになると、そういう慰安婦に癒してもらおうと思う軍人はいないと思います。そのため、慰安婦に対する暴力は慰安婦にとっては大きな損害であります。このことから、話の中で登場するような暴力は行われなかったと思います。慰安婦への虐待、慰安婦の被害を訴える運動家たちは、戦場にいた慰安婦たちがほとんど帰れなかったという話をします。しかし、日本軍慰安所の管理人の日記を見ると、この日記は1942年から1944年まで約2年間の日記ですが、かなり細かいところまで様々な話を書いている。

その中を見ると、1944年からすでにシンガポールから慰安婦が朝鮮に帰国しているのがわかります。日記の中から確認できる帰国した慰安婦は17人、この慰安所には20人くらいがいたと思われるのですが、その中で17人が朝鮮に帰国したことがわかります。もちろん一箇所の慰安所だけの例をもって、全ての慰安婦がちゃんと朝鮮に帰れたとは言えないと思います。しかし実際は、戦争が終わる前に早い段階で帰国した慰安婦たちがいたことは確実です。

その慰安婦たちはある意味運が良かったとも言えます。しかし、運がとても悪い慰安婦たちもいました。終戦の時まで戦場に残り、郵便貯金を返してもらえなかった人だったり、もしくは軍票が紙くずになってしまったという女性たちもいました。しかし、具体的な報酬を貰って、朝鮮に帰国できたという例を見ると、性奴隷という説は成立しないと思います。慰安婦は前借金でお金を貰って、それを働きながら返していく。そういう年期

契約労働者と言えます。

次は慰安婦たちを虐殺したという論について紹介したいと思います。戦争末期に慰安婦たちを虐殺したという話があるのですが、映画「鬼郷」の最後のシーンをご覧ください。慰安婦たちを連れ出して、穴に入れて銃を乱射して慰安婦たちを殺すという場面が描かれています。



映画「鬼郷」での慰安婦虐殺シーン（写真提供：朱益鐘）

韓国には、慰安婦虐殺の証拠を発見したという主張する学者たちがいますが、その代表的な例がソウル大学の鄭鎮星教授です。この人はもう退任していますが、鄭教授の下で博士論文を書いて慰安婦研究を続けてきた康誠賢という研究者が、2018年2月27日に開かれた公開シンポジウムで、慰安婦の虐殺について説明しています。紹介されたのは中国とビルマの間にある騰衝という地域の雲南城の映像です。そこで日本軍と中国軍の戦いが雲南省で起こりました。そこで撮影された映像ですが、音声はありません。

まず、1つ目の動画です。裸になって死んでいる人たちがいるのですが、その中に立っている人は中国軍の兵士です。中国軍の兵士が、何かを探しているような場面が映っています。



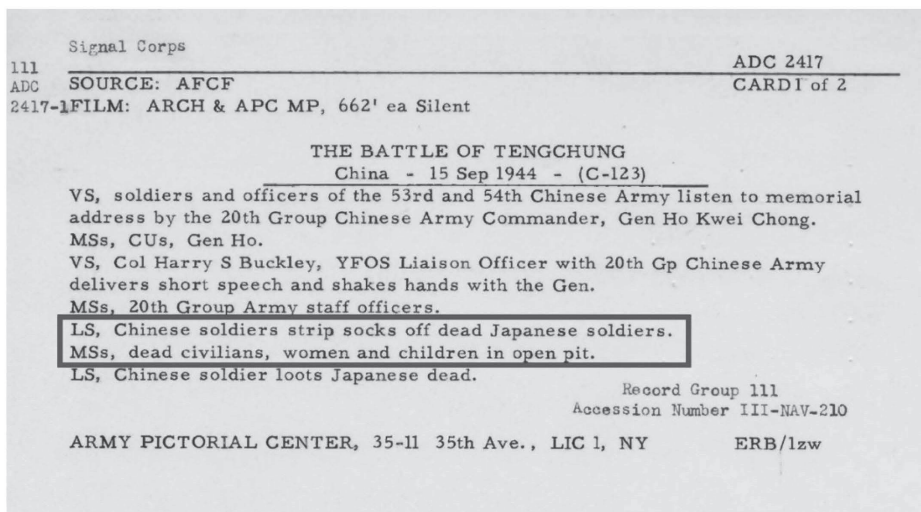
騰衝戦闘後 1 中国人兵士が死んだ日本軍兵士の靴下を脱がしている。
（写真提供：朱益鐘）

2つ目の映像です。これは攻撃が終わった後の場面ですが、煙が出て、まだその影響が残っているのが確認できます。



騰衝戦闘後2 穴の中で死んだ民間人、女性、子供たち。
(写真提供：朱益鍾)

映像を撮影した米軍が作成した書類がありますが、この中には騰衝の戦闘と書いてあります。以下の文書の四角箱の中には、中国軍の兵士が死んだ日本軍の兵士の靴下を脱がしていると書いてあります。そして、その次の行には死んだ民間人女性、子どもと一緒にいると記載されています。上の一行目の「LS」と書いてあるのが一つ目の映像の説明文です。下の「MSs」が二つ目の映像を説明している文章です。



米軍が作成した映像に関する説明文書 (写真提供：朱益鍾)

しかし、これを韓国で説明した研究者は、一行目の最後にピリオド(「.」)がついているのですが、これをコンマ(「,」)と解釈したのです。そうなると、内容が変化します。つまり、

中国軍の兵士が日本軍そして民間人女性、子どもの靴下を脱がしているという意味になります。これは一つの文章ではなく、「LS」と「MSs」がそれぞれ異なる映像の記号であることは、研究者ならば本来知っているはずで

しかし、この映像が韓国でどのように説明されたかという点、前の二つの文章を一つの文章だと見て、一つ目の映像は日本軍だけではなく、民間人と女性と子どもも死んでいる映像だと解釈して、裸になっているのは慰安婦だと主張しています。ですが、一つ目の映像で死亡しているのは文書に書いてある通り、日本軍だけです。実際に映像を見ると明らかに全員男性です。そして、この映像を見ると死体には銃で撃たれた痕跡がありません。おそらく、日本軍兵士が自決した後だと思われます。

つまり、裸の日本兵の死体を見せて「これは慰安婦だ」と言って、韓国の研究者たちは慰安婦虐殺の動かぬ証拠が見つかったと主張しました。このシンポジウムを終わったその日に韓国の有力テレビ放送などでは、このシンポジウムの話をしながら、慰安婦虐殺の証拠が見つかったという報道を大々的に行いました。一言で言うと、詐欺だと言えます。

二つ目の映像で死んでいる女性は慰安婦だと思いますが、騰衝には城があったのですが、中国軍が城へ集中砲撃を行って、その砲撃で亡くなったのだと思われます。

本日の発表の内容を整理すると、慰安婦強制連行や性奴隷は作り話で、偽りです。しかし、こうした捏造された話を見ていくと、挺対協といった市民団体が公金を横領したということが理解できます。最初から自分たちの作り話で集まった募金なので、少くも自分たちで使っても問題ないだろうという思惑が最初からあったのではないかと思います。韓国では現在、慰安婦運動は失速した状態にあります。運動を主導していた挺対協に対する、市民からの信頼は地に落ちました。

2015年に韓日慰安婦合意がありましたので、韓国政府が新たに日本に対してこの問題を議論し、何かを要求することはできません。反日的な文在寅政権でも、慰安婦問題について日本政府に何かを要求したことはありませんでした。おそらく、慰安婦合意があったため、日本政府は韓国の市民団体あるいは政府が何かを要求しても一切反応しないと思います。私の予想ですが、慰安婦問題はこれ以上盛り上がることはなく、力を失い、話題にも上らなくなると思います。

しかし、気を付けねばならないことがあります。慰安婦被害者たちが韓国の裁判所で日本政府を相手に訴訟を起こしましたが、韓国の裁判所は原告側の主張を認めてしまいました。これは国際法的にはあり得ない話ですが、文在寅政権の時に韓国の裁判所が、日本政府は慰安婦たちに対して補償すべきだと判決を出したので、問題が引き継がれていると言えます。韓国の裁判所が日本政府に対して、慰安婦に対する賠償命令を出しましたが、文在寅政権も日本政府に対して何かを要求するような強い対応は取れませんでした。なので、あまり意味のない判決だったと思うのですが、もし今後、韓国で文在寅政権以上の予想できない政権ができた場合、この問題が再び問題になる可能性があると思います。これが今の段階で唯一、私が懸念しているところです。

今後、日本と韓国は、なぜ慰安婦問題がここまで厄介で大きな問題になってしまったのか、それを反省して振り返る必要があると思います。なぜ偽の慰安婦の被害の話に日本と韓国、そして全世界が騙されてきたのか、それに対する反省です。日本や韓国にも様々な歴史学者がいます。慰安婦に関する嘘の情報と話をなぜ信用したのか、それに

関して反省が必要だと思います。歴史学者を含めた学者たちは、この問題にこれ以上深く関わりたいとは思っていないと思います。

朝日新聞が1991年に、韓国の済州島で慰安婦狩りがあったという吉田清治の話をもそのまま引用して、それが慰安婦問題をこじらせた一つの爆発的な原因になったのですが、それを朝日新聞は2014年になってようやく取り消して、訂正しました。朝日新聞は勇気を持って前の過去の過ちを認めてそれを訂正したわけですが、今まで事実とは異なる話を広げてきた韓国の研究者、もしくは日本で強制連行・性奴隷の話を広げた吉見義明先生、そして戸塚悦朗弁護士などは、朝日新聞のように自分たちの過去の発言とか主張の過ちを認めることが出来るのでしょうか。

もしくは、彼らの嘘の主張を検証もしないで同調した他の学者たち、そして反省がなかった人たちは、今後朝日新聞のように何かを訂正したり、反省することがあるでしょうか。一つの世代で様々な詐欺の話を広げた。そういう人たちは、責任を取ってもらいたいと私は思っています。

慰安婦問題は、これまで30年以上という長い時間をかけて広がったものですが、彼らが慰安婦問題を反省、もしくは訂正するまでは、今後も長い道のりになると思います。

以上で私の発表を終わります。ありがとうございました。

(会場 拍手)